

科目ナンバリング：DIS-1-351-06

国際学部：「卒業認定・学位授与方針」で謳う「基礎知識」を身につける為の科目

■授業の目的及び到達目標

中学・高校の教壇に立つ者にとって、恐らく最も答えに窮するのは「地理って何？」という素朴な質問ではないかと思う。この質問に簡潔に答えるには、地理学の歴史を学ぶ必要がある。地理学の歴史には国別の特徴があつて複雑な面もあるのだが、日本の場合は拓大生にとっては興味津津な側面もある。拓大生っぽい地理の先生を目指そう！

■授業計画

1 地理思想の発達①

バビロニアから中世ヨーロッパにおける地図の発達を通じて、地理思想の発達過程について紹介する。人類は地球は丸いということにどのようにして気がついたのかといった素朴な問題についての検討が中心となる。

2 地理思想の発達②

地理学は19世紀に近代科学として成立した。このことを理解するために、まずこの時代の「科学」をとりまく思想的状況について概観する。地球にも歴史があるという発見が、キリスト教徒にとっていかに重大な問題があつたかについての検討が中心となる。

3 近代地理学の誕生

地理学の創始者とされる2人のドイツ人研究者について紹介する。自然地理学の祖アレクサンダー・フンボルトは当時のヨーロッパにおける英雄でもあつた。また、人文地理学の祖とされるカール・リッターはその後の地理学に大きな影響を与えることになった。

4 近代地理学の傍流①

フォン・チューネンの農業立地論を地理学に取り込んだのは《新しい地理学》である。《新しい地理学》は概念操作によって純粋理論を志向したが、チューネンの農業立地論は産業革命以前の資本主義分析であつて、その時代背景とともに読むとその凄さがかかる。

5 自然地理学と人文地理学の関係

フランス地理学のブラスシュは環境可能論者として、環境決定論を唱えたドイツ地理学のラツェルと比較されることが多い。これに対して、地政学の祖であるイギリスのマッキンダーの時代認識との関連で、フランス地理学の誕生について検討する。

6 交通革命と旅行者が見た「風景」

20世紀初頭にドイツ地理学は「景観」を研究対象とするようになった。地人相関論との関係でこの時代背景について検討すると同時に、その後の地理学における「景観」の取り扱われ方とその問題点について紹介する。

7 環境決定論に見る「東北」

ハンチントンの『気候と文明』は環境決定論の典型であつて、もはや学術的意義はない。しかし、問題の文明表を見てみると「北部日本」は「南部日本」より文明度が低いとされており、地域格差の観点から再検討すると、ある重要な事実が浮き彫りになる。

8 ドイツ地政学—忘れ去られたもうひとつの地理学

ドイツの地政学者カール・ハウスホーファーはナチスに協力したことで知られる。「大東亜共栄圏」の発案者と見る向きもあるが、代表作『太平洋地政学』を読み返すと、日本の地域格差の問題と密接に関連するある問題が重要なヒントになっていることがわかる。

9 近代地理学の傍流②

アルフレッド・ウェーバーの工業立地論を地理学に取り込んだのは《新しい地理学》である。しかし、ウェーバーの凄さを知るには、むしろ《新しい地理学》との対立点に注目した方がいい。そこで、ウェーバーの産業集積論を中心に取り上げることとする。

10 集落と都市の地理学

20世紀のアメリカで、それ以前の都市とは全く異なる形式の都市が誕生した。これによって、都市地理学という新たな分野が誕生した。そして、都市地理学は20世紀の地理学の代名詞となった。そこで、都市の何がそんなに地理学者を魅了したのかについて紹介する。

11 近代地理学の傍流③

ヴァルター・クリスタラーの都市システム論を地理学に取り込んだのは《新しい地理学》である。《新しい地理学》は都市システム論を《幾何学の帝国》にしてしまったが、大量消費社会の成立という時代背景との関連で読み直すと、20世紀文明の本質が透けて見えてくる。

12 高度経済成長と日本の地理学①

戦後日本における地理学のキーワードのひとつである「都市計画」を取り上げ、それに関係する諸問題について紹介する。具体的にはハウードの田園都市論、後藤新平による震災復興、戦後の多摩ニュータウンなどを題材とする。

13 高度経済成長と日本の地理学②

戦後日本における地理学のキーワードのひとつである「国土計画」を取り上げ、それに関係する諸問題について紹介する。具体的には所得倍増計画における太平洋ベルト地帯構想、全国総合開発計画などを題材とする。

14 日本の地理学よもやま①

明治末に日本の大学で地理学講座が開設されるまで、地理学の普及にはキリスト教徒や文学者などの様々な人たちが貢献しており、実はそうならざるを得ない事情もあつた。そうした人たちの関係の中から生まれたエピソードについて紹介する。

15 日本の地理学よもやま②

自然地理学を中心とするドイツ地理学の全盛期に日本は開国した。このため、日本における人文地理学の発達には、新渡戸稲造や柳田國男が主催した「郷土会」が大きな役割を果たした。この動向を日本の近代化との関連で検討する。

■授業の方法

授業は演習と講義からなる。演習では白地図を用いて、河川・山・都市などの地名を覚えてもらう。基礎学力の養成が目的のひとつであるが、白地図を用いて作業を行うという手法は、学校の地理の授業の定番でもある。

■予習・復習

自主性を重視し、予習も復習も特には求めない。

■成績評価の方法（成績の評定方法、授業態度、レポート等の扱い）

平常点(40点)と定期試験(60点)の総合評価。詳細は開講時・授業中に説明する。定期試験の内容は前期・後期を通じた作業課題が出題範囲となるため、一切の泣き言は許さない。教員としての資格に欠けるものだと、反省しなさい。

■教科書・参考書

演習で、帝国書院『新詳高等地図』を使用する。ただし、高校の授業で使用するのであれば、他社製でも可とする。

■関連する科目

地理、人文地理Ⅰ、自然地理Ⅰ・Ⅱ、地誌Ⅰ・Ⅱ